

かわのはなし

3. 準備作業（1）

川村通商株式会社 鍛治 雅信

鞣しとは、皮のコラーゲン線維に鞣剤を作用させて革にする事を言います。つまり、鞣しを行う前に、皮をコラーゲン線維だけにしなければならぬのです。

この作業を準備作業と呼びます。

英語ではBeamhouse Workと言うのですが、最初にこの単語に会った時には、どう訳せば良いのか困りました。

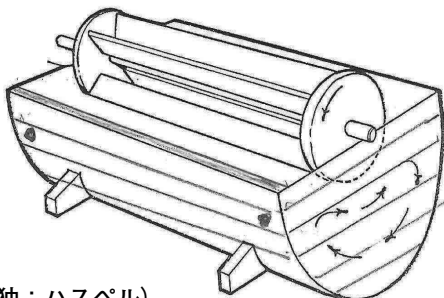
後で解ったことですが、Beam は屋根の梁^{はり}のことで、ここでの作業は蒸気やガスが発生するので、いくら天井を付けてもすぐに抜け落ちるため、天井を付けずに梁だけの家で作業を行ったことから来ていると言うことです。

実際にこの準備作業では、色々な危険なガスが発生しますし、機械化が進んだ今でも大変な作業です。

この準備作業の最初は水漬けから始まります。原皮が塩蔵皮でも乾皮でも同じです。

水漬けには円筒形を縦に割ったような桶の上部に、水をかき回す羽を付けた形のパドル（図参照）と言う装置かドラムを使用します。コンクリートミキサー車に積まれているのと同じミキサーを使ったミキサードラムと言うのも有ります。

英語でパドル、ドイツ語ではハスペルですが、何故か関西では訛^{なま}ってバトルと呼びます。



パドル（独：ハスペル）

それらの装置に水と原皮を投入し、少し動かして折り畳まれた原皮や丸まった原皮を開かせます。そして暫く静置^{しぼら}します。

この段階では、殆ど薬品は使用せず、皮表面の泥や血液などの汚れを落とすだけです。

続いて水を換えます。今度は新しい水に界面活性剤やソーダ灰などのアルカリを使用し、原皮の吸水性を高めます。

更に防腐剤を入れます。時間を掛ければ原皮は徐々に水を含んで柔らかく、大きくなりますが腐敗も始まります。

これは干しシイタケや干しアワビを戻すのに似ています。塩の浸透圧で組織内の水分を抜いたり、天日で乾燥させた物を水に戻すと、最初の形より柔らかく大きくなるのです。

水漬け工程の目的には汚れ落とし以外に、この効果も有ります。最初の水漬けの段階で塩は抜けています。つまり塩鮭を水洗いした様な物です。此処からは時間との勝負となります。特に気温の高い夏場は、防腐剤の併用と24時間以内の水戻しが必要となります。

勿論、原皮の保管も重要です。腐敗の始まった原皮では、この水漬け段階で水面に抜けた毛が浮かんできます。

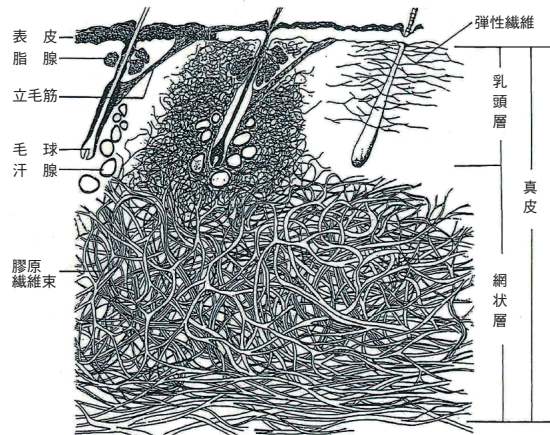
原皮の段階で動物の毛は引っ張っても抜けません。もし抜けるようなら、既に腐敗が始まっていると言う証拠で、その原皮の加工/保存に問題が有ります。

現在ほど保冷設備の整っていなかった頃は、原皮は常温で保管されていました。

その為、夏場には小さなハエが原皮に卵を産みつけ、それが孵^{かえ}って蛆^{うじ}が多く発生していました。やがてこの蛆が蛹^{さなぎ}となるのですが、水漬け作業で原皮をパドルに投入している時

には、この蛹のとげの部分が刺さるのでしょう。首筋に入ってチクッとすることがよくありました。

大体、この水漬け（水戻し）作業は24時間を目途とします。冬場は原皮の戻りが悪いので少しお湯を使う事もありますが、国内では常温での作業が普通です。



牛原皮の断面図

水漬けを終えた原皮、この場合は牛原皮ですが、その断面図です。魚や爬虫類の皮ではこの毛が鱗に変わるとおっしゃってください。

この皮の乳頭層と網状層の部分がコラーゲン線維です。これからの作業でコラーゲン繊維以外の部分を除去して行くのが準備作業です。

水漬けを終えた皮はフレッシュと言う工程に移されます。この場合は新鮮と言う意味のfresh ではなく、肉と言う意味のfresh です。文字通り、皮の肉面に付着している脂や肉、結締組織を除去します。

現在はロールで挟み込み、高速で回転するロール歯とロールとの隙間で簡単に削り取れますが、昔は蒲鉾状の板の上に毛を下に皮を広げ、銚子と言う両端に取っ手の付いたナイフで削り取っていました。

この結締組織の除去が上手く行われないと、皮の肉面からの薬剤の浸透が不十分となり鞣しが上手く行えません。

個人の方が鹿や猪の皮を自分で鞣してみ



銚子の写真

たいと言うメールを頂きますが、この特殊なナイフと蒲鉾板が無いと、殆どの方がこの作業でギブアップされます。

皮革業界ではこの削ぎ落した肉片や結締組織の事をニベと呼び、ニカワやゼラチンの原料として使用します。

このニベと言う言葉は、江戸時代の高級なニカワをニベと言う魚の浮き袋から作った事から、後になってニカワの原料をニベと呼ぶようになった様です。ニベはグチやイシモチとも呼ばれる魚で、キス釣りの時にキス以外でよく釣れる魚です。

現在でも<ニベもなく断られた>と言う様に人間関係の密着度を表す言葉で残っています。

肉面の結締組織の除去が済めば、次は一番厄介な毛の除去です。

太鼓用皮など昔ながらの方法だと、^{ぬか}糠などを塗って毛根部をバクテリアの働きで緩め、その後物理的に除去します。

姫路の白鞣しも同様に市川の川中に皮を晒し、水中のバクテリアにより毛根部を緩めて抜きます。近年には酵素脱毛なども開発されましたが、均一な脱毛を行うのが難しく、消石灰による石灰脱毛が広く行われています。

消石灰液に漬ける事で、皮のコラーゲン線維がアルカリ膨潤を起こし、毛根部が緩む事を利用した方法です。

現在では硫化ソーダや水硫化ソーダを用いて毛を溶かし、時間差で消石灰でアルカリ膨潤させることで脱毛とコラーゲン線維のオープニングを同時に行う方法が取られています。